

松木満史の初期作品の評価*

和山大輔**

Reputations of Manshi MATSUKI's Early Works

Daisuke WAYAMA

キーワードKeywords: 松木満史Manshi Matsuki、青森の近代洋画Modern oil paintings of Aomori

1. はじめに

青森県立郷土館では2017(平成29)年5月26日(金)から6月25日(日)まで、企画展「松木満史展」を開催した。旧木造町(現つがる市)生まれの洋画家・松木満史(まつきまんし、1906(明治39)～1971(昭和46)年)は、少年時代から棟方志功のライバルとして絵の道を歩み、本県洋画界に大きな貢献をしながら、棟方ほど知名度には恵まれていない。当館ではこれまでも数回松木に関する展示を行っているが、本展では20代後半から50代にかけて制作された作品を順に展示し、特にフランス滞在前後の作風の変遷に焦点を当てて紹介した。20代の頃の暗い重厚感が、30代初めのフランス滞在を経て一気に明るい色彩へと脱皮し、晩年に向かって独自の重層的な表現に収斂していく、というのが松木の画業の大きな流れである。この点を来場者に効果的に伝えることができたのではないかと思う。

関連行事として、企画展特別講座とギャラリートークを実施した。講座では当時の新聞記事などを辿り、松木が周囲からどのように評価されてきたのかを紹介した。青森や東京の支援者、親友の棟方志功らが、松木の画家としての力を大いに信頼していたということ会場全体で共有することができた。ギャラリートークは高校生と一般を対象に各1回行った。高校生対象の回では、今まで知らなかった地元の画家を知ることができてよかった、色彩の変化が興味深かったという感想があり、若い世代に地元の画家を伝える貴重な機会となった。一般対象の回では、終了後に「若い頃に松木の堤川のアトリエを友人数人と訪ねた」というエピソードを披露してくれた方もいた。同時代を生きた人々の中には、松木の存在がはっきりと記憶されていたようである。

本展覧会ではフランス滞在以後を重点的に紹介したため、それ以前の時期についてはいくつかの断片を示すに留まった。よって本稿ではフランス以前の時期を取り上げ、展覧会の補足としたい。これによって、実物があまり確認されていない初期の作品がどのように評価されてきたのかを示したい。

2. 少年時代

松木は1912(大正元)年に地元木造の向陽小学校に入学するが、芸術への思いから1918(大正7)年に中退する。翌1919(大正8)年、青森市の仏師・本間正明のもとに弟子入りした。木彫の修行に励む傍ら、市内の古書店・大観堂で技法書を購入して洋画の知識を身につけていった。

この時期、青森市内では洋画に関連するいくつかの出来事が起きている。1919(大正8)10月、のちに社会党代議士となる淡谷悠蔵が、青森市郊外の新城に「新しき村」青森支部を設立した。「新しき村」は1918(大正7)年に、雑誌『白樺』の創刊メンバーである武者小路実篤が、宮崎県児湯郡木城町に設立した生活共同体である。設立後、全国各地に支部ができた。美術界におけるこの団体の功績は、全国の支部を通じて泰西美術複製展覧会を開催したことである。これは名称のとおり、ヨーロッパの美術の複製画の展覧会であった。青森市では1922(大正11)年10月1日、赤十字青森支部で開催されている。このときの展覧会の担当者は「新しき村」の福長という人物で、青森側の窓口を淡谷が務めた。翌月11月8日には、武者小路が青森市を訪れて「新しき村」について講演を行っている。日記等の記録は確認されていないものの、松木がこれらの催しに足を運んだであろうことは想像に難くない。

泰西美術複製展覧会は、1925(大正14)年にも青森県で開催された。10月1日から3日は弘前商業会議所、10月5日から7日は青森市赤十字支部の二ヶ所での開催であった。出品作品について、青森の銅版画の第一人者である今純三が言及している。今は1923(大正12)年9月の関東大震災で被災し、青森に戻ってきていた。

[...]出品目録を通覧したところで、全点数百四十五点、古代ギリシャから現代まで、芸術の高調された各時代の代表的のものは一通り網羅されている。

また、複製展覧会とはいうもののそれ以外に、原作品の二十余点がある。それは古代埃及の薄肉彫刻一点と、ロダンの銅像一点、絵画に於いては、レンブラント、ドーミエ、セザンヌ、ルノアール、マチス、マリー・ローランサン等の銅版画、石版画、画稿等で、概して小品である。[...]²⁾

* 青森県の近代以降の絵画史に関する研究(2)

** 青森県立郷土館 研究員(〒030-0802 青森市本町二丁目8-14)

「セザンヌもゴッホも所謂、後期印象派の画家であるが、生前には格別有名な人ではなかった。セザンヌは物又は風景を描く場合、晴天であろうが、曇天であろうが、又朝、昼の区別等は、別段彼には煩わしいことではなかった。

「…ゴッホはまた、頗る熱烈な画人であった。炎天下、無帽、裸足で画布に向い、色は、原色そのままを画布にたたきつけるという程であった。遂には、興奮と、焦燥のあまり、自殺をしたが、彼の作品の展覧会に、観覧者たる婦人の如きは、往々、彼の絵の不気味さに、顔をそむけることを余儀なくするほどである。」³⁾

主に複製画であったとはいえ、様々な時代の作品を展示していたことがわかる。武者小路に関係する団体の主催だけあって、セザンヌやゴッホなど『白樺』で紹介されていた画家たちの作品もあった。各地の「新しき村」支部が仲介した泰西美術複製展覧会は、ヨーロッパの美術を鑑賞するという体験を地方にもたらした。松木は1926（昭和元）年に上京したため、この展覧会のときにはまだ青森にいた。おそらくは二回目の展覧会も訪れていたであろう。

二回の複製展覧会の際の1923（大正12）年、松木は肋膜炎を患い、約半年の療養を余儀なくされる。退院後は地元の木造町で彫刻、音楽の勉強に励んだとされているが、その主な場となったのがおそらく文化サークル「土曜会」である。土曜会は、弘前市出身で早稲田大学哲学科に学んだ葛西新八郎がこの年の1月に結成し、毎月の第一土曜日に開催したことからこのように名付けられた。松木は6月2日の第六回会合に参加し⁴⁾、それ以後も足を運んだものと思われる。

新八郎は1916（大正5）年に上京し、同郷の成田泰次郎の仲介で武者小路と知り合う。それを機に白樺派の文学と思想に傾倒し、自らも白樺派を名乗るようになった。しかしこれが災いして、文士気取りの放蕩生活を送るようになる。元々弘前市和徳町の千葉太という醸造家の次男であった新八郎は、これが原因で木造町の葛西家に養子に出されることとなる。葛西家は素封家で、養父の麟平は後に町長を務めた。

新八郎は同じく葛西家の養女であったみね子と1917（大正6）年に結婚する。しかし文学への情熱がくすぶり続けていた彼は、1920（大正9）年に突如妻を残して上京する。小作米を売って得た生活資金を携えていくも、それも瞬く間に使い果たし、失意の中再び木造に戻ったのであった⁵⁾。

土曜会は葛西のこうした遍歴ののちに結成された。したがってこの会は第一に、主宰者の文学的情熱の慰めの場であった。そしてその底を流れるのは、白樺派の思想と文学であった。

土曜会には葛西夫妻のほか地元の知識人、のちに青森県知事となる竹内俊吉や、彫刻家となる工藤繁造が参加していた。具体的な活動としては、クラシック音楽の鑑賞や戯曲の朗読、文芸創作や批評などが行われていた。武者小路の文学について遅くまで語り合う日もあったという。竹内は後に、1931（昭和6）年8月2日付けの東奥日報で以下のとおり土曜会を回想している。

「久しぶりで村へ帰ったのは大正十二年の夏、わが家の垣根の卯の花がさかりの頃である。

「…村へ帰って間もなく、偶然にその頃木造に住んでいた葛西新八郎氏と知り合った。

「…葛西氏は白樺派の人だったので、このグループはかなり白樺の影響を受けた。葛西氏は割合に金に余裕があったので本やレコードや絵（複製のものだが）をたくさん集め、グループはこれによって讚歎した。

レンブラントやミケランジェロの話に夜を更かしたのも度々であったし、ロマン・ローランの『ジャンクリストフ』の翻訳が出たとき、このグループはどんなに感激して、この本を求めてよんだことか。今思えばなんという質朴？なことであろう。

その年の秋に、私だけ五所川原に住むことになったが、依然葛西氏を中心とするグループは継続された。そしてこのグループに『土曜会』と名づけて脚本の本読み会を一つのまとまった仕事として持つことになった。

その冬、葛西氏は弘前へ転住して雑誌『氷柱』を出し、工藤繁造君は私と一しょに五所川原に住むことになり、松木満史君も上京したりして、土曜会のグループも自然解散という結果になった。けれども、白樺の人道主義華やかに美しき頃の記憶として、あの、夏から秋、冬にかけての『土曜会』の集まりこそつつましく美しいものだった。」⁶⁾

1923（大正12）年の一連の東奥日報記事では主に朗読の様子が記されているが、この回想は美術についての議論も行われていたことを伝えている。

松木は土曜会で、複製画を通して美術に対する想像を膨らませ、葛西から白樺派の薫陶を受けた。松木の療養期間が約半年、土曜会への初参加が1923（大正12）年6月2日なので、松木はこの年の初めに入院し、退院後すぐに土曜会に顔を出すようになったのだろう。災い転じ、その後の芸術観の土台を育む機会を得たのであった。

翌1924（大正13）年、9月11日付けの記事で松木の名が東奥日報紙上に登場する。内容は向陽社第2回展覧会の開催を伝えるものである。向陽社は松木、盛忠七、川崎正人、飯田良太郎、水島尚の向陽小学校出身者5名で立ち上げた団体である。展覧会は9月14日と15日の2日間、木造公会堂で開催された。同人の作品だけでなく、「画壇の才人と称さるる青光画社棟方しこう氏の近作5点が後援の意味で出陳」されたという⁷⁾。これに先立つ5月23日から25日、青森市では棟方志功率いる青光画社の第5回展覧会が開催されて、向陽社も後援出品している。

棟方は1921（大正10）年、洋画団体の青光画社を立ち上げて、第1回展覧会を翌年10月15日に青森市の新町小学校で開催している。松木は設立メンバーの1人に数えられることもあるが、作品の出品自体は1924（大正13）年の第5回展覧会が最初である⁸⁾。まだ画家としての第一歩を踏み出したばかりの二人が、互いの団体を後援し合うことには、広報面での相乗効果を狙う意図もあっただろう。小さい紙面であったにせよ、無名の松木が取り上げられたのは大きな意義があったと言える⁹⁾。

3. 青年時代

青森での活動を経て、松木は1926（昭和元）年の秋に上京する。これに先立つ同年1月、竹之台陳列館で開催された第22回太平洋画展において、木彫《寒日》が入選した。そのことは東奥日報で早速報じられた¹⁰⁾。おそらく松木の中央の美術展での入選を伝える最初の記事である。

当時の東奥日報には芸術関係の記事が多い。同年12月13日には、県人芸術家の特集が組まれている¹¹⁾。この中で棟方も松木も紹介されているが、割かれている紙面は棟方の方が大きい。棟方の記事は顔写真付きで、それまでの歩みや人柄について触れ、大変な努力家であるということが強調されている。松木は出身や入選歴、作風について最低限の情報が伝えられるのみであった。

上京後、松木は着実に実績を重ねていく。太平洋画展入選の翌年、1927（昭和2）年4月23日から5月15日に東京府美術館で開催された国画創作協会第6回展に《哲学堂近景》が入選する。4月25日付けの記事は、国展を帝展と院展に並ぶ展覧会と位置づけたうえで、顔写真付きで松木を紹介している。記事は前年の太平洋画展にも触れ、松木がまったくの独学で美術を学び、入選を勝ち取ったことを伝えている¹²⁾。

1928（昭和3）年3月、松木は母りさの死にともなって一時帰省するが、このとき友人らの勧めにより作品頒布会を実施している。3月14日付けの記事はこのことを伝え、松木について「芸術に対する真摯な姿勢は既に一般に認められている」と書いている¹³⁾。何気なく登場した「真摯な姿勢」のような言葉は、以後松木について回ることとなる。

この年、東奥日報社は創立40周年を迎え、これを記念して東奥年鑑と青森県総覧を創刊することとなる。これに先立って、同社は「各方面の知名人士」に青森県の先人や文化についてのアンケートを行い、8月15日付けの記事でその結果を公開している¹⁴⁾。松木も回答者の一人に選ばれており、中央画壇での松木の活躍が地元で認知されてきたことがわかる。

9月14日から9月18日には、記念事業の一環として東奥日報社主催の青森県文化象徴展覧会が開催された。松木はここに《太陽花と裸婦》を出品している。記事はこの作品を「新傾向を示した」、「堅実なる大作」と伝えている¹⁵⁾。別の記事では、この作品を見た小学生が「おいお嬢さん上から毛虫が落ちますよ」と冷やかしていたことが伝えられている¹⁶⁾。構図は裸婦の上方にひまわりが配されたものだったようだ。松木は裸婦を好んで描いたが、おそらくこの作品はその最初期のものである。

裸婦に対する観客の反応について、同日の別の記事は以下のように伝えている。

「第一会場（公会堂）の二号室は洋画と彫刻の陳列で純然たる芸術の殿堂である。[...]ところが心なき人には此の裸体が妙に見られる。即ち『フーン』と言うくすぐったいような感心してる様な、恥ずかしがってる様な声が耳に入ることしばしばだ。

奥さんと旦那さんと一組が仔細に見ていたが桂井、松木両氏の裸体画の前へ行くと奥さんは、チョイと旦那さんの尻を突いた。旦那さんは『フーン』と来た。」¹⁷⁾

記事は「純然たる芸術」として裸体画を擁護しているが、観客は戸惑いと好奇の眼差しを向けていたようである。明治以降、日本への裸体画の導入・普及に中心的役割を担ったのは黒田清輝である。黒田が展覧会に出品した裸体画は、新聞などで論争を巻き起こした。1901（明治34）年の白馬会第6回展では風俗を乱すとして警察が取り締まりに乗り出し、白馬会側とのやりとりの末、黒田らの作品に布を巻いて展示するという事になった（いわゆる「腰巻き事件」）。こうした衝突を経て、裸体画は徐々に日本に受容されていった。しかし中央と地方、また美術愛好者と一般市民の間では、当然その度合いには差があった。記事で紹介されている観客には、裸体画に対する戸惑いが見て取れる。

腰巻き事件のような激しい衝突が裸体画受容の通過儀礼だったとすると、青森はそれを経ずに「いつの間にか」裸体画を受け入れたかのような印象がある。近隣の秋田では以下のような事件があった。

「新しき村の絵の展覧会是一日から三日まで三日間弘前商業会議所において開会すべきことは既報の通りだが、（中略）秋田市で開催の際には中学校等の団体観覧もありすこぶる人気を集めた由である。同地ではドラクロア作『サルダナヴァルの死』と言う敵軍城内に攻めよせ城内の男女が悲鳴をあげている図は残虐であると言うので撤去を命ぜられた由報ぜられているが、弘前では警察の干渉がなかったらしい。」¹⁸⁾

「新しき村の絵の展覧会」というのは、すでに触れた「泰西名画複製展覧会」のことである。県全体に新しい美術を待望する雰囲気があったのか、青森特有の気質のゆえか、あるいは秋田の一件を受けて何らかの根回しがあったのかは定かではないが、弘前では予定どおり展覧会が開催された。これは作品鑑賞の面では幸いだったと言えるだろう。一方で観客となる市民は、この展覧会や展示作品の是非（《サル

ダナヴァルの死》には裸婦も描かれている)について議論する必要がなくなった。

新しい美術の、ある意味でスムーズな流入のなか、松木の裸体画も特段の批判にさらされることなく鑑賞の眼に供されたのであった。県文化象徴展覧会以降も松木は裸体画を好んで描いている。その評価自体は曖昧なまま、裸婦は松木の代表的題材として定着していく。

松木はこの頃までには主要な若手県人画家の一人に数えられるようになっていたと言っていざらう。1928(昭和3)年10月28日付けの東奥日報に掲載された連載では、写真付きで経歴、所属団体および入選歴が紹介されている¹⁹⁾。なお、松木の次の回は棟方になっており、当時から松木と棟方是对比的に取り上げられていたことがわかる。

ただし批評家からの言及は棟方の方に集中している。1930(昭和5)年5月14日付けの東奥日報には、今純三が第1回東奥美術展覧会の批評を寄せている。この展覧会には主に青森県出身の美術家が参加し、若手にとっては中央画壇への登竜門としての役割を果たしていた。棟方は津軽照子(1887—1972)、前田慶藏(1886—没年不明)という20歳ほども年上の先輩洋画家の次に言及され、以下のように絶賛されている。

「棟方志功氏の大作、画面がピンクとエメラルド、或いは朱と空色、ないしは赤と藍との対照を以て構成され、情熱的に、表現的に、必然的に描かれてある。『風景』と題された一点などフランス画壇の大ものルオーの作品に見る豪壮さを持つ調子にまで至っている。」²⁰⁾

対して松木は、洋画家について述べた段落の最後に「沈み行くような一種の重みの快感」と触れられているのみである。しかしそれだけに、この言葉は当時の松木の作風を端的に表していると考えられる。

では当時の松木の作風は、具体的にどのようなものだったのだろうか。この時期の作品は確認されているものが少なく、実物を参照して考察することは難しい。しかし松木の制作を日頃から間近で見ていた棟方が、東奥日報に寄せた「続画室縁起帳」の中でその変化を綴っている。記事は今の批評が掲載されてから一年後の1931(昭和6)年5月10日付けである。

「今の松木の仕事こそ見られる物だ。ニュオクラシズムに自らを置いてしていた仕事を、この程、リアリズムにそれを破って、自分を丸ごと入れ、それをはっきり掴んで、鋭く、ますます、深く新時代に先駆して、意識の確実をはっきり切って次から次と、大作に夢中になっている。」²¹⁾

松木は「ニュオクラシズム」から「リアリズム」に移行しつつあったという。「ニュオ」とは「ネオ」もしくは「ニュー」のことだろう。これら二つの用語の内容を検討してみたい。

松木の画業の最大の転換点は、1938(昭和13)年から1939(昭和14)年にかけてのフランス滞在である。それまでの松木は重厚感のある暗い色調の絵を描いていたが、在仏中から明るく軽やかな作風に変化していった。一見してすぐにわかるその変化は、1940(昭和15)年4月3日付けの東奥日報で伝えられている。松木はフランス滞在を経て、それまでの作風から一気に脱却したのであった。したがって渡仏前の作風を考察することで、棟方のいう「ニュオクラシズム」や「リアリズム」の意味するところが見えてくるはずである。

「ニュオクラシズム」の内容については、二つの可能性が挙げられる。一つは岸田劉生らによる北方ルネサンス風の様式を指している可能性であり、もう一つはパブロ・ピカソやアンドレ・ドラックが試みていた擬古典様式を指している可能性である。

渡仏前の青年時代の作風についてしばしば引き合いに出されるのが、岸田劉生である。青光画社時代からの友人である鷹山宇一(1908—1999)は、松木の死後刊行された『松木満史作品集』の中で、「松木は岸田劉生を、また私はヴラマンクをひそか師表としていた」と回想している²²⁾。松木が中野にアトリエ「眺鏡堂」を構えた1927(昭和2)年、青森中学を卒業した鷹山は上京して川端画学校に入った。以後、眺鏡堂に出入りするようになる。目指すところの違う二人は、よく芸術論を闘わせたという。土曜会で『白樺』を学んだ少年時代、松木はすでにその同人である岸田の芸術観に触れていたはずである。それ以後、岸田の芸術が松木の制作に影響を与え続けていたとしても不思議ではない。眺鏡堂で松木と共同生活をしてきた棟方もまた、当然松木の作品の中にある岸田の影を感じていたことだろう。

岸田ははじめセザンヌの影響を受けるが、やがて時代を遡ってデューラーなど北方ルネサンスの美に傾倒し、緻密で硬質な画面を描くようになる。この傾向は岸田が1915(大正4)年に設立した草土社を象徴する作風となった。この日本近代洋画における一種の古典回帰について、棟方は「ニュオクラシズム」と表現したのかもしれない。

他方、松木自身も新古典主義について言及している。松木は1932(昭和7)年10月16日付けの東奥日報に「日本美術界の現状」と題する論評を寄せている。この中で松木は、入選歴などに惑わされずに作品を鑑賞するべきだと前置きしたうえで、帝展、二科会、国展などの主要な美術団体について解説している。

『帝展』詳しく言えば、帝国美術院展覧会。で、文部省の美術展覧会である。[...]洋画部ではピカソや、ドラックの新古典派(ネオクラシズム)から影響を受けた、伊原宇三郎、鈴木千久馬、中野和高という人々の出現によって永く沈滞していた帝展の洋画部も新生面を開くことになる。」²³⁾

ここで松木の言っている「ネオクラシズム」は、ピカソらが一時期試みた擬古典様式のことである。キュビズムを用いて描く対象を様々な解体・総合したピカソだが、1918年ころから数年間は重量感があり輪郭のはっきりした人物像を描いた。これはピカソの画業のなかの「新古典主義の時代」とされている。したがって、松木が「ネオクラシズム」の語を用いるとき、それは当時のフランス現代美術の概念としての新古典主義を指していた。

岸田が北方ルネサンスに傾倒するようになった1910年代中頃と、ピカソが新古典主義の時代に入った1918年は、数年程度しか違わない。さらにここから松木の作風の変化を棟方が指摘するまで十数年が経っている。したがってネオクラシズムの意味するところは、いくつかの意味が併存する多義的なものであった可能性がある。ただし、いずれの意味においても、クラシズムというものが確たる輪郭や重量感を備えたものである点は共通している。したがって、「松木がネオ（ニュー）クラシズムから脱却しようとしている」というとき、それは少なくとも「単なる重さを脱し、新たな表現を模索し始めた」ということであつたと考えられる。

その試行錯誤の中で、後に松木のアイデンティティとなる色彩が目ざされ始める。1934（昭和9）年5月16日付けの記事では、第9回国展に入選した《禁》が好評を博したことが伝えられている²⁴。この作品は青森市の松木屋ギャラリーで同年8月17日から3日間開催された個展にも出品された。8月27日付けの記事には、土曜会時代からの友人である彫刻家・工藤繁造の展覧会評が掲載されている。

「自分の知って居る画家中、その出発に際して彼くらいいわゆる絵の拙い不器用な人はなかったように思う。けれども彼は非常にひた向きの一本調子な男であり、粘り強い情熱家である。

其の絵の拙い不器用な男は何を描いたか。それは彼の其のひた向きの一本調子な粘り強さを持って彼の全人間全生活を打ち込んだ心の絵であった。[...]松木の絵はたしかに一般的な常識的な御上手さはないが、彼の絵には全人間全生活から感受された画家としての最も正道な感興、即ち驚きの世界があると思う。

[...]色調から来る落ちついた深い魅力には他の追従を許さぬ松木の世界があり、国展入選作の大作「林下」は彼の全力を費した創作的意思の濃厚なものであつて彼の近來の到達した深い色彩的魅力と彼独特なロマンチックな構想と相俟って独特な魅力に観者を引きつけるものである。[...]」²⁵

これまで見てきた記事の中で、松木の技術に触れているものはなく、その点についての評価は曖昧であった。しかし工藤ははっきりと「拙くて不器用」と述べている。逆に強調されているのが松木の感性と、それを表現する色彩である。松木は1938年から1939年のフランス留学以降、色彩の画家としての評価を高めた。これ以前にも工藤のように色彩を評価する向きがあつたということは、松木はこのころからすでに色彩の画家としての萌芽があつたことを示している。

松木の作品に向けられる評価と、松木が他人の作品に求める美の基準は一致していた。松木は1934（昭和9）年秋の第4回東奥美術展覧会で洋画部門の審査員を務めた。10月15日付けの東奥日報には松木の審査評が掲載されている。

「鑑別に際して考えた事は、どんな様式傾向の作品でもその人に必然な美を生かしている純粋な真実性のある作品を多く取りたいと思った。自分の趣味や好みをいつわる事は出来ないが、出来るだけ偏頗「ママ」な選び方をせず、なるべく広汎に、食わずぎらいを避け生命のある作品を一心に求めることにした。

大体に於いて搬入作品の傾向は自然発生的な通常写実主義が一番多く、それより一步深入りした現今の中央画壇の一つの流行病の如き感覺的ロマンチックな作為の物と、新しがつて消化不良に陥っているもの、老人くさく萎縮した骨董的なものと四つに分けることが出来る。[...]」²⁶

松木は平凡すぎるものや単に流行に乗っただけのものは評価しなかった。記事の最後では「特選作として、わりに地味なおとなしい作品を選んだ自分の真意をよく分かって欲しいと思う」と弁明しており、選考にあたっては内部でも議論があつたものと思われる。

「その人に必然の美」とは、工藤のいう「全人間全生活を打ち込んだ心の絵」と同様の意味と捉えて差し支えないだろう。つまり松木が他者の作品に求めるもの（それはすなわち自分の描きたい絵である）と、他者が松木の作品の中に見るものは一致していたのである。

人格面の評価とともに見出された色彩の芽は、その後も順調に育っていった。青森県師範学校教諭の山田實は、1936年2月3日付けの東奥日報に「北奥の美術」と題する論評を掲載している。山田は「北国的暗調」や「コロリスト」などと項立てて、東奥美術展と青森の洋画界全体の批評を行っている。この中で松木はやはりコロリスト、つまり色彩画家と位置づけられ、以下のように評価されている。

[...]松木氏の色彩も決して単なる洋風のものでも、ルネッサンス的のものでなく、むしろ日本古典的な青であり黄であつて、この対立的寒暖両調の二重奏は、その三十号大の静物画に於いて最大限度のハーモニーと充分の落ちつきを示し、暗濁の如く見えながら画面至る所に溢れた色彩の諧音は入念のアクキュミラシオンと相俟って香気を放っていた。[...]」²⁷

松木の色彩は、未だ暗さを残しながらも、第三者の眼にも特徴あるものとして映るようになっていた。それはやがて、フランス留学を経て新たな展開を見せることとなる。

4. まとめ

これまで述べてきたように、松木は少年時代に土曜会や泰西名画複製展覧会といった場を活用し、洋画の情報収集と理解に努めた。その後、向陽社や青光画社同人として実際に作品を発表し、洋画家としての第一歩を踏み出した。地元からの認知度や評価では棟方に後れを取りながらも、そういったことには反応せず、自分にとって必然の表現を模索していった。それはやがて、松木独自の色彩として芽吹きはじめた。

松木は技術的には必ずしも評価されていなかったと言っている。しかし色彩という強みを見出し、それに自らの「生命」を投入し、巧拙を超えた魅力のある絵画を作り出したのであった。松木は技術が先にあった画家ではなく、描くべき内容があり、それを表現するために技術を身につけていった画家であると言える。本稿では詳しく言及できなかったフランス留学も、内的な必然性に従った結果だったのだろう。したがってその作品を適切に評価するためには、その制作動機や背景およびプロセスを十二分に踏まえることが不可欠であるが、個々の作品についての研究は今後の課題としたい。

謝辞

松木満史展の開催にあたり、松木家ご遺族の松木ルミ氏から格別のご配慮を賜りました。また、関係各機関の方々から展覧会の内容について多くの示唆をいただきました。記して感謝申し上げます。

註

- 1) 淡谷悠蔵. 東奥文壇、武者小路氏を迎へて(上). 東奥日報. 1925-10-22.
- 2) 今純三. 泰西名画展について(一). 東奥日報. 1925-10-02.
- 3) 今純三. 泰西名画展について(一). 東奥日報. 1925-10-04.
- 4) 土曜会のこと. 東奥日報. 1923-07-02.
- 5) 小野正文. 北の文脈、青森県人物文学史. 上巻. 第2版. 青森. 北の街社. 1991. p. 160-163.
- 6) 竹内俊吉. 書閑記(十五). 東奥日報. 1931-8-2.
ただし、この竹内の回想と他の資料あるいは記事との間には出来事の前関係に違いがある。2010年に青森県近代文学館で開催された「竹内俊吉生誕110年展」でまとめられた「竹内俊吉の生涯 二」によると、竹内が北海道の室蘭郵便局から郷里に帰ったのは1922(大正11)年の春であった。竹内はその後間もなく葛西と知り合ったという。また、同年秋から岩木川改修工事事務所五所川原工場に勤務し、工藤繁造と川除村小曲(現・五所川原市小曲)で共同生活を始める。それを解消して五所川原に移ったのは1924(大正13)年頃とされている。青森県近代文学館. “企画展「竹内俊吉生誕110年展」開催にあたって”.
<https://www.plib.pref.aomori.lg.jp/top/museum/takeuti110.html>. (参照2018-01-05)
- 加えて、竹内の回想では五所川原への転居の後、土曜会が名付けられたことになっているが、1923(大正12)年5月2日付けの東奥日報に葛西が寄せた記事によると、土曜会の名称と活動はこの年の1月から存在していた。翌日の記事では、1月の会合に竹内が参加していたことも記されている。
- 7) 向陽画社洋画展. 東奥日報. 1924-09-11.
- 8) 對馬恵美子. 「青光画社」考—棟方志功生誕百年にちなんで. 青森県立郷土館調査研究年報. 第28号. 2004. p. 75-88.
- 9) この時期、松木はまだ「満子」と号していた。そのため、新聞では「みつこ」とふりがなを振られることもあった。まだ世間に認知されていないことが表れている。このあともしばらく「満子」の表記を使うが、1930(昭和5)年ころからは「満史」と名乗るようになっていく。同年2月14日付けの東奥日報では、第5回国展に松木、棟方、下山木鉢郎の入選が報じられているが、この記事での表記は「満史」である。表記の変更は誤読を避けるためだったのだろう。
- 10) 松木満子入選、大平洋画展で. 東奥日報. 1925-1(日付判読不可).
- 11) 県民我らの魂を、永遠に語る芸術. 東奥日報. 1925-12-13.
- 12) 下山、松木両氏、国展入選. 東奥日報. 1927-04-25.
- 13) 松木満子氏作品頒布会. 東奥日報. 1928-03-14.
- 14) 東奥日報. 1928-08-15.
- 15) 本社文化展のこと. 東奥日報. 1928-09-11.
- 16) 本社主催文化象徴展(第四日目). 東奥日報. 1928-09-18.
- 17) フーンの部屋、洋画と彫刻室雑感. 東奥日報. 1928-09-18.
- 18) よもやま. 東奥日報. 1925-10-03.
- 19) 県外に活躍する県人の面影(五十三). 東奥日報. 1928-10-28.
- 20) 今純三. 東奥美術展評. 東奥日報. 1930-05-14.
- 21) 棟方志功. 続画室縁起帳. 東奥日報. 1931-05-10.
- 22) 鷹山宇一. “松木との出会い”. 松木満史作品集. 松木リョウ編. 青森. 松木満史画集刊行会. 1973. ページ番号なし.
- 23) 松木満史. 日本美術界の現状. 東奥日報. 1932-10-16.
- 24) 松木満史氏の国展入選『林下』好評. 東奥日報. 1934-05-16.
なお、作品のタイトルについてこの記事では「林下」と表記されているが、当時の国展目録を復刻版により確認したところ、「禁(ふもと)」となっていた。青木茂監修. 近代日本アート・カタログ・コレクション062、国画会第1巻. 東京文化財研究所編. 東京. ゆまに書房. 2003. p. 397.
(註21)に挙げた「松木満史作品集」所収の略年譜でも、「ふもと(ただし字は麓)」と記載されている。よって本作品のタイトルは、「禁」として差し支えないと思われる。
- 25) 工藤繁造. 松木満史の個展を観る. 東奥日報. 1934-08-27.
- 26) 松木満史. 生命のある作品を. 東奥日報. 1934-10-15.
- 27) 山田實. 北奥の美術. 東奥日報. 1936-02-03.
この論評が発端となり、山田と岡田廉という人物との間で激しい議論が起こることとなる。同年2月17日には岡田の「美術の理解について—山田實氏に—」、2月24日には山田の「幽霊を斬る者 岡田美術論への葬送曲」、3月9日には岡田の「枯れ木も山の賑ひ—山田實君の昂奮への鎮魂賦」が東奥日報紙上に掲載された。最終的には感情的な応酬にまで発展しているが、淡谷悠蔵が3月30日付けの「文芸時評(2) —2、3月—」の中で収拾を図った。山田の論評には過度に専門用語が用いられ、しかもその意味は必ずしも明確ではない。したがって論旨が解りづらくなっているが、松木の色彩に注目していることは確かである。

※引用箇所の旧仮名遣いは現行の仮名遣いに、旧字体は現行の字体に改めている。句読点及び改行箇所は適宜改めている。

※引用箇所の[...]の表示は文章の省略を表す。誤植と思われる箇所はそのまま記載し、該当箇所の直後に[ママ]と表記した。

松木満史略年譜（1906 — 1936）

※この年譜は「松木満史展」（平成29年5月26日から同6月25日、於：青森県立郷土館）ブックレット所収の年譜を再編集したものである。
 ※「■」は資料を参照した際判読できなかった文字を表す。

西暦(和暦)	月	日	事項
1906(明治39)	1	21	松木久助とりさの長男として青森県西津軽郡木造町有楽町15番地に生まれる。本名金七。
1910(明治43) 4歳	4		『白樺』創刊。
1912(大正元) 6歳	9		木造町向陽小学校に入学。 岸田劉生、フェウザン会を結成。翌年5月解散。
1915(大正4) 9歳	10		岸田劉生、草土社を結成。1922(大正11)年解散。
1918(大正7) 12歳	11		木造町向陽小学校高等科を中退。 武者小路実篤、宮崎県児湯郡木城町に「新しき村」を開村。
1919(大正8) 13歳	10		青森市の仏師・本間正明に弟子入り。木彫を学ぶ。 淡谷悠藏、青森市郊外の新城に「新しき村」青森支部を設立。
1921(大正10) 15歳			棟方志功、青光画社を結成。
1922(大正11) 16歳	1	14	岸田劉生、春陽会を結成。
	10	1	青森市赤十字支部で泰西美術複製展覧会が開催。
		15	青光画社第1回展覧会、青森市新町小学校で開催。
	11	8	武者小路実篤、青森市で「新しき村」について講演。
1923(大正12) 17歳			「新しき村」青森支部に淡谷悠藏を訪ね、しばらく村内に住み込む。「新しき村」の会員になる。
	1		肋膜炎になり入院するが、約半年で退院する。
		6	葛西新八郎、木造で土曜会の会合を開く。
	5	20	青光画社第2回展覧会、青森市新町小学校で開催。
	6	2	木造町大神宮拝殿で土曜会の会合に初参加。
	8		『白樺』廃刊。
		25-27	青光画社同人・田中豊治の追悼洋画展覧会、青森市新町小学校で開催。実質の青光画社第3回展覧会。
	9	1	関東大震災発生。
	11		青光画社第4回展覧会が中止になる。
1924(大正13) 18歳	5	23-25	青光画社第5回展覧会、青森市内堤橋近くの青森館で開催。向陽社同人として後援出品。このころ、名前を「満子」と表記し始める。
	6		築地小劇場（6月13日開設）の公演を見るため上京。
	9	14-15	向陽社第2回洋画展（木造公会堂）開催、出品。棟方志功が後援出品。
	10	12	青光画社第6回展覧会（新町小学校）開催。油彩1点を出品。
1925(大正14) 19歳	5	23-27	青光画社第7回展覧会、松木屋呉服店で開催。《風景一》、《風景二》、木彫数点を出品。
	9	2-4	棟方志功個人展覧会、青森市寺町・マツミ草花店で開催。
		7	棟方志功、上京。
		2	東奥日報に今純三の「泰西名画展に就いて（一）」掲載。出品作の紹介、複製画の有用性を述べる。
	1-3		弘前商業会議所で泰西名画展開催。秋田市ではドラクロアの《サルダナヴァルの死》が残虐性ゆえに撤去を命じられたが、弘前では警察の干渉はなかった。
		5-7	泰西名画複製展覧会、赤十字青森支部で開催。
	4		東奥日報に今純三の「泰西名画展に就いて（二）」掲載。ジョット、アンジェリコ、マンテーニヤ、ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、レンブラント、ミレー、セザンヌ、ゴッホ、ローランサンを紹介。
	10	6	東奥日報にさいとうの「新らしき村の画の展覧会のことを（一）」掲載。さいとうは雑誌『黎明』同人の齋藤善太郎か。
		7	東奥日報にさいとうの「新らしき村の画の展覧会のことを（二）」掲載。複製画を軽視する人々への批判を述べる。
		8	東奥日報にさいとうの「新らしい村の画のことについて」掲載。
		15	午後二時半、弘前高校講堂で武者小路実篤の講演会開催（同校学芸部主催）。
		22	東奥日報に淡谷悠藏の「東奥文壇 武者小路氏を迎えて（上）」が掲載。武者小路の人物像を述べる。
		23	東奥日報に淡谷悠藏の「東奥文壇 武者小路氏を迎えて（下）」が掲載。実篤が色紙に残していた言葉、「この道より われを生かす道なし この道を歩く」を紹介。
	11	28-12.4	青光画社第8回展覧会、松木屋呉服店で開催。油彩《深浦風景》出品。
1926(昭和元) 20歳	1	23-2.17	第22回大平洋画展、竹之台陳列館で開催。木彫《寒日》入選。
	3	7	東奥日報に国画創作展の記事掲載。
	9	11-13	青光画社第9回展覧会、赤十字青森支部で開催。《稚い松のある景色》出品。審査員を務める。
	秋		上京。阿佐ヶ谷97番地に住む。棟方志功と同居。
1927(昭和2) 21歳	4	23-5.15	第6回国画創作展覧会開催。油彩《哲学堂近景》入選。
	6	上旬	青光画社第10回展覧会（赤十字青森支部）開催。
	秋		大屋リョウと結婚。野方町上沼袋263番地にアトリエ「眺鏡堂」を建て転居。

松木満史の初期作品の評価

1927(昭和2) 21歳	9	上旬	青光画社第11回展覧会開催。審査員を務める。
	10	6	東奥日報「クロツキイ画集について」で、アカデミー・グランド・ショミエールでのクロッキー指導が紹介される。ショミエールは松木がフランスに留学した際に学んだ画塾。
	11	15	武者小路実篤ら、大調和会を設立。
		15-26	第一回大調和美術展覧会、上野・日本美術協会で開催。《唐茄子と鞆豌豆》入選。
	12		棟方志功がアトリエに同居。棟方、初めての木版画《中野眺鏡堂窓景》を制作。
1928(昭和3) 22歳	3	上旬	母・りさの死去に伴い帰省。作品頒布会実施。
	7	6-8	青光画社第12回展覧会、赤十字青森支部で開催。《下多賀風景》、《下多賀の海》、《裸女》、木版《夏衣の婦》出品。
	8	15	東奥日報社創立40周年記念の東奥年鑑及び青森県総覧のためのアンケートが東奥日報に掲載される。
	9	11	東奥日報に青森県文化象徴展覧会の出品予定作品が掲載。松木の《太陽花と裸婦》も紹介される。
		14-18	青森県文化象徴展覧会、青森市公会堂などで開催。
		17-30	東京・朝日新聞社楼上で第二回大調和美術展覧会。《浄信苑池端》、《曇日鳴沢》入選。
	10		棟方志功、帝展に入選。10月16日付けの東奥日報で大々的に伝えられる。
		28	東奥日報「県外に活躍する県人の面影(53)」に取り上げられる。
		30	棟方志功、東奥日報「県外に活躍する県人の面影(54)」に取り上げられる。
		12	8
		22	東奥日報に淡彩《彩果図》掲載。
1929(昭和4) 23歳			長男・土草樹誕生。
	8	24-25	個展(赤十字青森支部)開催。春陽展等への入選作、新作など57点を出品。 《梨や葡萄》、《胡瓜や蕃茄》、《林檎畑一》、《蕪や慈姑》、《沼袋小景》、《唐茄子と鞆豌豆》、《金■花》、《裸女》、《真鶴風景》、《■阿佐ヶ谷一》、《同二》、《果樹園寸景》、《中夏小景》、《初夏寸景》、《静物》、《男裸像》、《湘南の春》、《鶯の宮風景》、《花卉》、《板柳夏日》、《沼袋静景》、《ステケシヤ》、《静物》、《春景沼袋》、《冬瓜と蕃茄》、《蕃茄や枇杷》、《浄信園池の端》、《石神井風景》、《哲学堂近景》、《中井風景》、《花々》、《静景雲日》、《横臥裸女》、《下多賀初夏》、《鶯の宮風景》、《太陽花と裸女》、《果實■々》、《小金井静景》、《下多賀風景》、《静日風景》、《津軽の山》、《裸女一》、《裸女二》、《阿佐ヶ谷雲日》、《寺の庭》、《葡萄棚》、《夏の縁端》、《婦》、《夏衣の婦(木版)》、《二童雪野を行く(木版)》、《朝景林檎樹(木版)》、《ある童女の顔(木版)》、《湯の女(木版)》、《湯殿(木版)》、《雪と少女(木版)》、《■の湯の宿(木版)》
	9	2	東奥日報に木版《林檎園》掲載。
	12	20	岸田劉生死去。
1930(昭和5) 24歳	2	10-24	東京府美術館で第5回国展。松木1点、下山木鉢郎2点、棟方志功3点が入選。このころから「満子」改め「満史」と名乗る。
	5	3-7 11-15	5月、第1回東奥美術展覧会(東奥美術社主催)に出品。 3日から7日:弘前物産陳列館 11日から15日:赤十字青森支部
		14	東奥美術展出品の油彩について、今純三から「沈み行くような一種の重みの快感」と評される。
	6	9	第2回国際美術展二部(東京府立美術館)に《風景》、《子の口風景》出品。入選。
	9	1	9月上旬に開催予定だった青光画社第14回展覧会が延期。会員の多くが在京のため。
	12	21	東奥日報に、棟方が松木との東京での共同生活の様子を綴った「画室縁起帳」が掲載。
1931(昭和6) 25歳	1		次男・量樹(かずき)誕生。同年8月死去。
		2-5 9-11	第2回東奥美術展覧会開催。油彩5点を出品。《着飾れる漁夫》、《林と小路》、《波浮の海岸》、《波浮の晩春》、《大嶋波浮港》 2日から5日:弘前物産陳列会館 9日から11日:赤十字青森支部
		4	弘前市品川町・カフェフジヤでの美術座談会に出席。
	5	10	第2回東奥美術展覧会への出品作品について、東奥日報に「2点の波浮風景は従来の手法だが、《嶋の新道》は目を引く」という趣旨の論評が掲載される。《嶋の新道》は《林と小路》のことか。 東奥日報に棟方の「続画室縁起帳」が掲載。フランス留学への強い願望、新たな作風に脱皮しつつある松木への期待、松木の次男の命名話などが綴られる。
		11	青森市・ナリタヤ食堂での東奥美術懇談会に出席。
		21	木造町公会堂での帰省歓迎会に出席。約70名が参加。会場に作品約20点を展示し、《林と小路》を町に寄贈。
	8	2	竹内俊吉が東奥日報連載「書閑記(15)」で土曜会を回想。松木にも言及。会はメンバーの転居などで自然解散したと。
		中旬	十和田湖を題材にした自作を頒布する「松木満史十和田画会」を組織。推薦者及び賛助員は国展審査員の梅原龍三郎、河野通勢、椿貞雄、二科会審査員の渡邊義知、帝展審査員の吉田久継、武者小路実篤の6名。
		10-12	第1回東奥美術展覧会(東奥日報社、東奥美術社共同主催)、青森市公会堂で開催。
	10	24-26	アブサン書画会(弘前市角ハ呉服店)に出品。
	29	東京・滝野川で東奥美術社総会が開催。	
	12	12-20	五所川原町の津軽鉄道本社で個展開催。十和田湖を題材にした作品など約50点を出品。
1932(昭和7) 26歳			彫刻家・渡辺義知の紹介により、玉川学園中等部の美術教員となる。
			玉川学園内に転居。
	1		棟方志功と鷹山宇一とともに日本版画協会会員に推薦される。
	10	16-18	第2回東奥美術展覧会、青森市公会堂で開催。油彩5点を出品。 《樹間少年像》、《桃色の家と温室》、《郷里の山中》、《裸婦》、《柿生の山》
	16	東奥日報に松木の論評「日本美術界の現状」が掲載。帝展、二科展、国展など、各種公募展の特色を述べる。公募展にはそれぞれ特徴があり、優劣はつけられないと主張。	
	23	東京・滝野川で開かれた東奥美術社懇談会に出席。	
1933(昭和8) 27歳	1		長女・ルル誕生。

和山大輔

	4	18-5.4	第8回国画創作展覧会に油彩《馬》を出品。O氏賞受賞。
	5	9-10	第1回鷹揚美術展覧会（弘前新聞社主催）、弘前物産陳列館で開催。油彩8点を出品。
	7	30	東奥日報に油彩《十和田湖》掲載。
	10	4	棟方志功の長男・巴里爾誕生。
	14-17		第3回東奥美術展覧会に油彩5点を出品。 《静物A》、《静物B》、《静物C》、《冬の下田港》、《景色》
1934(昭和9) 28歳	4	22-5.9	第9回国画創作展覧会に出品。油彩2点が入選。 《児》、《禁》
	5	16	東奥日報に《禁》が掲載。好評を得たことが伝えられる。
	6		三男・正史誕生。
	7		父の看病のため木造に帰省。
	17-19		松木屋ギャラリーで個展。第9回国展入選の《児》、《禁》など38点を展示。
	20		東奥日報に油彩《鎌倉の濱》掲載。
	8	22	青森市新町・三浦甘精堂ホールで美術座談会（青森洋画家協会）に出席。
	25-26		津軽鉄道本社で個展開催。約30点を展示。
	27		東奥日報に工藤繁造の「松木満史の個展を観る」が掲載。松木屋ギャラリーでの展示について言及。芸術に対する一途な姿勢、最近のめざましい進歩、色彩の魅力について評価する。
	9	8-12	松木屋ギャラリーで青森県名勝地展覧会（東奥日報社主催）が開催。油彩《曇る小泊》を出品。展覧会は15日から17日まで八戸市・三萬呉服店に巡回。
10	14-17		第4回東奥美術展覧会が開催。洋画部門の審査員を務める。油彩6点を出品。 《土草樹（1）》、《土草樹（2）》、《肖像》、《憩ひ》、《伊豆江の浦》、《静物》
	15		東奥日報に東奥展の審査評「生命のある作品を」掲載。純粋な態度から生まれた絵を特選にしたこと、地方画家がデフォルメを多用する傾向にあることへの危惧を述べる。
1935(昭和10) 29歳	4	28-5.17	第10回国画創作展覧会、東京府美術館で開催。油彩4点入選。《家族》、《児想う》、《林間》、《休息》。
	5		棟方志功、国画家会友に推薦。
	8	9-10	秋田市図書館で個展。
		中旬	権太に写生旅行。29日に戻る。
	9	1-2	五所川原町三好庵で風景色紙展覧会を開く。
	10	17-20	第5回東奥美術展覧会が開催。油彩《裸婦》を出品。
	11		四男・隆史誕生。
1936(昭和11) 30歳			祖父・金五郎死去。
	2	3	東奥日報に山田實の論評「北奥の美術」が掲載。松木の色彩が「単なる洋風のものでも、ルネッサンス的のものでなく、むしろ日本古典的」と評される。
	3	28	工藤繁造死去。
	4	3-18	東京府美術館で第11回国画創作展覧会が開催。油彩3点入選。
	12		国画家から褒状を受ける。無鑑査出品の資格を得る。
	27		東奥日報に「工藤君の死と感じたこと二、三」が掲載。3月28日に死去した工藤繁造との思い出、近いうちに教員を辞めることなどを述べる。
	8	上旬	フランスへの渡航費を得るため、松木満史作品頒布会を組織。玉川学園内に事務所を設ける。梅原龍三郎と武者小路実篤が趣意書に支援の言葉を寄せる。
			玉川学園を辞め、世田谷区祖師ヶ谷に転居。
	17		東奥日報にペンネームP.Q.Rの「人芸術の素描 松木満史」が掲載される。松木の純粋な人柄と質実な芸術を賞賛し、渡航を後押しする。
	10	15-18	青森市公会堂で第6回東奥美術展覧会が開催。《風景》2点と《裸婦》を依頼出品。